

レクチャーコンサート「思い出のベンジャミン・ブリテン」 Benjamin Britten as I knew: A musical portrait

ジョン・エルウイス John Elwes

加藤 拓 未・訳

本稿は、本研究所および文学部芸術学科の主催、日本アルバン・ベルク協会の共催で、二〇一四年十月二十一日（火）に本学白金校舎バレットゾーン二階アートホールにて行われたジョン・エルウイス氏によるレクチャーコンサートの内容を活字にしたものである。

エルウイス氏は、英国が生んだ世界的なテノール歌手だが、少年時代はボーイ・ソプラノ歌手ジョン・ハヘシー John Hahessey として活躍された。偉大な作曲家ベンジャミン・ブリテン Benjamin Britten（一九一三―一九七六）もその楽才を認め、彼のために作品を書いたり、一緒にレコードの録音を行ったりするなど親交が深かったという。二〇一三年はブリテン生誕一〇〇周年にあたり、エルウイス氏はタブリンをはじめとする四都市で、ブリテンに関するレクチャーコンサートを行

ったが、今回、明治学院バツハ・アカデミーとのバツハ《ミサ曲口短調》公演（十月十三日、於・赤坂サントリーホール）のために来日したこと機会に、日本の音楽ファンにもブリテンのことを紹介したいと希望され、このレクチャーコンサートが実現した。

さて、当夜のレクチャーコンサートでは、少年時代のエルウイス氏とブリテンの思い出について解説と実演で語られたが、氏いわく、この内容は英国の、どのブリテンの伝記書にも書かれていないとのこと。したがって、貴重なお話を聞く機会となった。

時刻が七時をまわり、司会の樋口隆一氏の紹介で、アートホール中央にエルウイス氏が立ち、ピアノ伴奏の久元祐子氏と通訳をつとめた訳者が両脇を固めた。そして会は、ブリテンの

《キャロルの祭典》作品二八 A Ceremony of Carols, Op. 28 から「入場」Procession・「ようこそ」クリスマス!」Welcome Yole・「子守歌」Babalow・「神に感謝を!」Deo Graciasの四曲の演奏ではじまった。

* * *

「入場」

今日、キリストは生まれました
今日、私たちの救い主が現れました
今日、天使たちは地で歌います
大天使らは、喜びます
今日、正しい人は歓喜し、言います
「いと高きところに神、栄光あれ。アレルヤ!」

「ようこそ、クリスマス!」

ようこそ、ようこそ
ようこそ、天国の王よ
ようこそ、その朝（二月二五日）に生まれたお方よ。
ようこそ、このお方のために歌いましょう!

ようこそ、聖ステファノ（二月二六日）と聖ヨハネ（二月二七日）
ようこそ、幼い子供たちよ（幼子殉教者の日、二月二八日）

ようこそ、殉教者トーマス（二月二九日）よ
ようこそ、めでたい新年（一月一日）よ
ようこそ、顕現節（一月六日）よ
ようこそ、親愛なる聖者たちよ

キャンドルミサ（聖燭節、二月二日）よ、至福の女王よ
ようこそ、老いも若きも
ようこそ、ここにいる人たち
ようこそ、すべての人びとよ、歓呼しましょう
ようこそ、次の新年も、その次も、またその次も。

「子守歌」

おお、私の大切な心臓よ、愛らしい幼子イエスよ
私の心のなかに揺りかごを用意しましょう
そうすれば、心ゆくまで揺らし
もう、あなたから離れることもありません。
さらに、あなたをこの上なく讃えましょう

あなたの栄光を讃える歌を歌って
心のうちにひざまずき

そして、あの良い子守歌を歌いましょう！

「神に感謝を！」

神に感謝を！ 神に感謝を！

アダムは縛られていました。契約に縛られていました。
冬を四千回、でも彼は長いとは思いませんでした。

すべては一つのリンゴ、彼が食べた一つのリンゴゆえ
聖職者たちが読む本に書かれてある通りに。

もしそのリンゴが食べられなければ
そのリンゴが食べられなければ

私たちの淑女が、天の女王となることは
決してなかったでしょう。

リンゴが食べられたその瞬間に
祝福あれ。

それゆえ、私たちは歌えるのです。

神に感謝を！ 神に感謝を！

皆様、「ようこそ！」 Wolcumi! — このレクチャーコンサートにお越しくださいました。ベンジャミン・ブリテンは、疑いなくヘンリー・パーセル以来、イギリスにおける最も重要な作曲家です。昨年、二〇一三年は、ブリテンの生誕一〇〇周年にあたる記念の年でした。ブリテンは一九一三年十一月二十二日に生まれています。しかもこの十一月二十二日は、音楽の守護聖人、聖セシリアの祝日にあたります。このレクチャーコンサートは、生誕一〇〇周年を記念した、私なりのいわばブリテンへのオマージュであります。

私は、生前のブリテンのことをよく知っています。そして今日は、私の個人的なブリテンの思い出をお話することで、それをみなさんと共有したいと思っています。また、私がブリテンと一緒に演奏した曲や、録音を行った曲を演奏したいと思っています。最初に演奏したのは、ブリテンが少年合唱とハープのために作曲した合唱曲《キャロルの祭典》です。この作品でレクチャーコンサートをはじめるのは、季節的に少々、意外な感じもいたしますが、実はこの曲こそ、私が人生で最初に歌ったブリテン作品だったのです。しかも、この曲を歌ったとき、私は生涯ではじめてブリテン本人と出会ったのです。

一九五九年一月、私はロンドンのローマ・カトリックの大聖堂、ウエストミンスター寺院のヘッド・コーリスターでした。ヘッド・コーリスターとは、聖歌隊のトップ歌手のことです。聖歌隊の指導者は、のちに世界的なチェンバロ奏者としても知られ

るようになったジョージ・マルコム George Malcom (一九一七―一九七)で、彼はブリテンの友人であり、同僚でもありました。マルコムは、私たち聖歌隊を鍛え上げ、雄弁で、類まれな力強い合唱サウンドを確立しました。そして、ブリテンに何度も、自分の聖歌隊を聴きに来いと誘い、おそらく、私たちの聖歌隊のために曲を書いてほしいとお願いしていたんだと思います。そういうわけで、ブリテンは、私たちの聖歌隊が演奏する彼の《キャロルの祭典》の演奏会に招待され、大聖堂にやってきたのでした。演奏会後、ブリテンは急いでマルコムに手紙を書き、少年聖歌隊の演奏に「驚いた」と感想を述べたそうです。そして《キャロルの祭典》の演奏会から六ヶ月後、ブリテンは、私たち聖歌隊のために《ミサ・ブレヴィス》*Missa Brevis in D*, Op. 63 を作曲し、この曲はウェストミンスター寺院で初演されました。ちなみにブリテンは、この《ミサ・ブレヴィス》を「半ズボンのミサ曲」と呼んでいました。本人に確認したわけではないのですが、おそらく少年は半ズボンをはくことが多いから、こんなニックネームをつけたんでしょう。この《ミサ・ブレヴィス》の初演はBBC放送によって録音され、現在でもCDで聴くことができます。

さて、私が実際にブリテンと共演したのは一二歳、ボーイ・ソプラノの時のことです。それは一九五九年七月にロンドンのロイヤル・フェスティバル・ホールで行われたヘンリー・パーセル Henry Purcell (一六五九―九五)のオード《万歳、輝

かしき聖セシリア》*Hail, Bright Cecilia* の演奏会でした。ブリテンは、《キャロルの祭典》の演奏会の際の、私の歌声を覚えていてくれて、このオードの小さなアリアを歌ってほしいと言ってくれたのです。同年、ブリテンは、ふたたびパーセルの小さなオペラ《ダイドとエネアス》*Dido and Aeneas* のマリーキュリー役を私に歌ってほしいと声をかけてくれました。しかも、これはBBC放送による録音の仕事だったので。ボーイ・ソプラノをソリストとして使うことは、実に大胆な選択でした。というのも、当時、少年合唱の声は、教会の外で聴かれることはなかったからです。ただし、実はパーセルもオードを演奏する際、セント・ポール大聖堂やウェストミンスター寺院から、少年歌手を集めて演奏していました。ですから、ブリテンがやったことは、単にパーセルの要求に忠実に従っただけなのです。それはさておき、ボーイ・ソプラノを世俗のコンサートで使うことに關して、ブリテンはその時代のパイオニアであったことは間違いありません。そして今日、それは、もはや当たり前のこととなっています。

このブリテンとの共演が実現するまで、私の少年聖歌隊での活動は、大聖堂の礼拝に限定されていきました。つまり、それはローマ・カトリックの大作作曲家による単旋律聖歌やミサ曲、モテットを歌うことでした。作曲家で言えば、パレストリーナやビクトリアなどです。一九五〇年代のローマ・カトリックの大聖堂では、私たち聖歌隊はラテン語の作品しか歌いませんでした。

た。英語で歌うこと自体が、奇妙で、異質なものの以外のなにものでもありませんでした。ですから、ブリテンのもとでパーセルの二つの作品を歌うにあたって、私にはちょっとした英語の歌唱発音の指導が必要だったくらいなのです。

さて、本日、パーセルを取り上げるのは、パーセルの音楽がブリテンの全音楽作品に最も大きな影響を与えたということを確認するためです。ブリテンは青年時代にパーセルの音楽を発見し、すぐにパーセルがどれほど素晴らしく、英語の歌詞を作曲しているのかを理解しました。そして、ブリテンはそれ以降、オペラを含む、パーセルの素晴らしい音楽作品を模倣しようと努力しました。それでは、この明白な影響関係を確認してみましよう。まずパーセルの聖セシリアの祝日のためのオード《ようこそ、すべての喜びよ》*Welcome to all the pleasures* から「美よ、愛の情景よ」*Beauty thou scene of love*を、次に悲劇《オイディプス》*Oedipus* から「ひとときの音楽よ」*Music for a while*を、こちらはマイケル・ティペットの編曲でお聴きください。

「美よ、愛の情景よ」

美よ、愛の情景よ

徳よ、汚れない火よ

欲望の熱を鎮めるために

天の力によって造られたものよ

汚れない、燃えるような歓喜のなかで

創意を必要とする音楽を

私たちは、リユートと声で

聖セシリアに、その輝かしい御名に捧げます。

「ひとときの音楽よ」

ひとときの音楽よ

あなたの心の悩みをすべて癒してください。

なぜ痛みが和らいだのか、不思議なほどに

喜ばれることを恥ずかしく思うほどに。

復讐の女神アレクトが

永遠の拘束から、死者を解放するまで

彼女の頭から蛇が落ちるまで

その手から、鞭が滑り落ちるまで。

ひとときの音楽よ

あなたの心の悩みをすべて癒してください。

一九六〇年七月、私はウェストミンスター大聖堂聖歌隊を退団しました。そのとき私は十三歳を過ぎていて、私の声はだんだんとソプラノの音域からアルトの音域へと下がってゆきました。そしてロンドンを離れ、イングリランド北部の寄宿学校に入

ることになったのです。ところが、入学一日目にして、私はこの寄宿学校が大嫌いだとわかりました。憂鬱な私の気晴らしとなったのは、入学した年の十二月にブリテンが、ロンドンの非常に有名なウイグモア・ホールの演奏会に出演するよう誘ってくれたことでした。したがって、私としては、この大嫌いな寄宿学校の最初の学期をほとんど休みするしかなかったのです。これ以上、嬉しいことはありませんでした。

このウイグモア・ホールの演奏会のためにブリテンは《五つのカンティクル》から「第二のカンティクル」をプログラムに入れました。この曲は「アブラハムとイサク」と題され、旧約聖書の「アブラハムとイサク」の物語をもとにテノールとアルトとピアノのために作曲されています。神はアブラハムの信仰を試そうと、息子イサクを殺し、生贄として捧げるように迫ります。イサクは少年なのですが、すでに申しましたように、ボーイ・ソプラノは通常、教会のなかだけのものです、その声が世俗の演奏会で聴かれることはなかったのです。ですから、このイサクの役は、実際には有名なコントラルト歌手、キャスリーン・フェリアー Kathleen Ferrier (一九二一―五三)を想定して作曲されました。しかし一九五三年当時のフェリアーは癌を患い、この年に亡くなってしまいうまで、ほんの数回しか、この作品を歌うことができなかったのです。ブリテンは、この役をキャスリーン・フェリアーの声で、どうしても録音したかったのですが、それは叶いませんでした。そこで別の女声アルト歌

手で録音は行われましたが、それはお蔵入りとなってしまい、四十年が過ぎてから、ようやく日の目を見たようです。

ウイグモア・ホールの演奏会では、私がイサク役を歌いました。演奏会が終わって、ブリテンは、急遽、この作品の録音しようとは決断したようです。なぜ急いだかというと、当時の私の声は、アルトの音域だったので、このイサク役にピッタリでした。ということは、私の声の音域はキャスリーン・フェリアーと同じ音域だったということになりますが、それはともかくとして、私の声変わりはどんどん進み、テノールの音域に落ちる気配が濃厚だったのです。それで、一九六一年一月、演奏会のわずか一カ月後のことですが、レコーディング・セッションが行われました(図1)。これは最高でした。なにせ、あの最

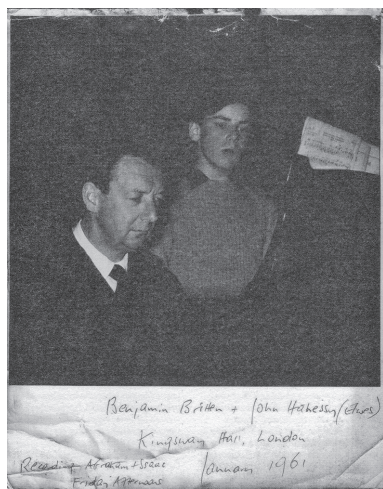


図1 一九六一年一月に行われた録音風景。ブリテン(左)のピアノ伴奏で歌うエルウィス氏(右)

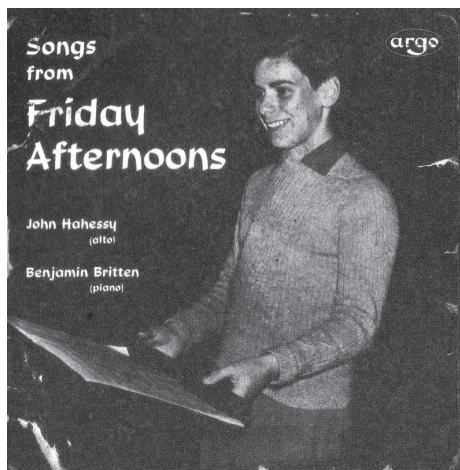


図2 ジョン・ハヘシー(エルウィス)のレコード・ジャケット、一九六一年(表)

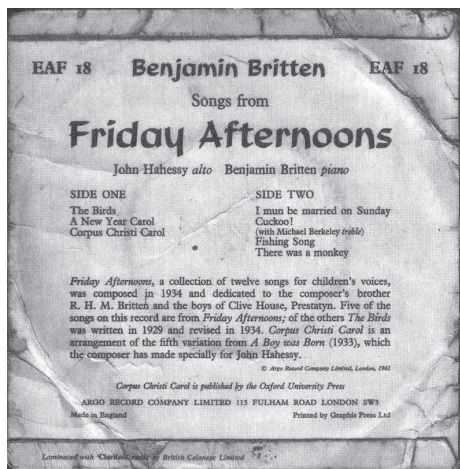


図3 ジョン・ハヘシー(エルウィス)のレコード・ジャケット、一九六一年(裏)

低な寄宿学校をさらに休めるというわけですから。そして、この「第二のキャンティクル／アブラハムとイサク」の録音が、商業的に発売された最初の録音になりました。つまり、「世界初録音」というわけですね。

録音セッション中、ブリテンは、もう一曲、小さな作品を録音しようと提案してくれました。それは、ブリテンがお兄さんのために作曲した作品で『金曜日の午後』作品七 *Friday Afternoons*, Op. 7 という子供向けの歌を集めたものでした(図2、3)。ブリテンのお兄さんは学校の先生で、その学校では

毎週金曜日の午後に音楽の授業があり、その授業のためにブリテンが作曲した作品を集めたもので、このようなタイトルとなっています。この二枚目の録音のために、ブリテンはクリスマス・カンタータ『男の子が生まれた』作品三 *A Boy was Born*, Op. 3 のなかの一曲「聖体のキャロル」*Corpus Christi Carol*を編曲し、しかも私に献呈してくれました。

さて、これから私が歌う曲のうち、いくつかは実に五十年ぶりに歌うことになります。それでは『金曜日の午後』より「釣りの歌」「新年のキャロル」「オレは日曜日に結婚しなさいいけ

ない」そしてクリスマス・カンタータ《男の子が生まれた》より「聖体のキャロル」をお聴きください。

「釣りの歌」

おお、粋な釣り人の生活よ
それは最高だ！
楽しさに満ち、ケンカもなく
そして、たくさんの人から好かれるのさ。
ほかの楽しみは、おもちゃのようなもの。
釣りだけが、合法的な楽しみだ。
なぜなら、釣の腕前で不幸になることはなく
ただ、満足と楽しみを与えてくれるんだから。

曙の女神アウロラが姿を現す前に
われら釣り人は、朝、起きて
目をさますためにお茶を一杯飲んで
怠惰な眠りを追い払う。
それから、われら釣り人は
時間さえあれば
背中に才能を担いで
テムズ河なんかを行ったり来たりするんだ。

太陽が暑すぎて

汗だくになるときは

ヤナギの木蔭に行って

涼むんだ。

われら釣り人は堤防で

スズキやカワカマス、コイやウグイを狙う。

ブリークやスナモグリのような小魚でも

ケチなことは言わず、満足なんだ。

「新年のキャロル」

さあ、泉からきれいな新しい水を汲んできました。
今年の新年を祝い、神を讃美するために。

集めた露を、讃えなさい。

水もワインも。

七つのまぶしく輝く黄金の針金と

輝かしい小ラッパも。

女王の統治を讃えよ。

彼女のつま先に、黄金を置いて。

西側のドアを開けて

旧年を出してしまいなさい。

集めた露を、讃えなさい。

女王の統治を讃えよ。

彼女のアゴに、黄金を置いて。

東側のドアを開けて

新年を迎え入れましょう。

集めた露を、讃えなさい。

「聖体のキャロル」

彼を連れて上がり、彼を連れて下がります

彼を連れて、茶色の果樹園へと進みます。

ルレイ、ルリイ、ルレイ、ルリイ

鷹は、私の友を連れ去りました。

その果樹園には、一つの館があり

その館には、紫と黒の布が掛けられていました。

館のなかには、ベッドが一つあり

赤と黄金の布が掛けられていました。

ルレイ、ルリイ、ルレイ、ルリイ

鷹は、私の友を連れ去りました。

寝台に臥せっているのは一人の騎士

彼の傷は昼となく夜となく血を流す

ベッドの傍らでひざまずくのは一人の小間使い

彼女は昼も夜も泣いています。

ルレイ、ルリイ、ルレイ、ルリイ

鷹は、私の友を連れ去りました。

ベッドの傍らに石碑があり

そこには『ギリストの御身』と刻まれていました。

「オレは日曜日に結婚しなきゃいけない」

オレは日曜日に結婚しなきゃいけない。

たとえ誰でも、そんな風になるもんさ。

オレは日曜日に結婚しなきゃいけない。

オレの名前はロイスター・ドイスター

丈夫で荒つぽい男さ。

オレは日曜日に結婚しなきゃいけない

クリスチャン・コンスタンスって女を見つけた。
千ボンドの値打ちがある後家さんだ。
オレは日曜日に結婚しなきゃいけない。

コンスタンスは、蜂蜜のように甘い。

オレは彼女の仔羊で、彼女はオレのウサギちゃんだ。

オレは日曜日に結婚しなきゃいけない。

オレたちが、結婚披露宴をするときは

誰でも、大歓迎さ。

オレは日曜日に結婚しなきゃいけない。

私が子供の頃に行った録音は、最近、五十年ぶりに再発売され、現在、聴くことができます。この録音セッションが、事実上、ベンジャミン・ブリテンと私の最後の音楽的コラボレーションとなりました。ただ、ブリテンは、これ以降も、常に私のことを気にかけてくれて、生活費のことを心配してくれたり、あの大嫌いな寄宿学校にもたびたび様子を見に来てくれたりしました。また、ブリテンのお手伝いさんは、彼に頼まれて、何度も美味しいケーキや差し入れを贈ってくれました。このケーキのおかげで、私はこの学校での生活を乗り切れたと言っても過言ではありません。

私は、だんだんとこの寄宿学校を休むようになり、代わりに

ロンドンの王立音楽大学で声楽を学ぶようになりました。学生時代、ブリテンの自宅のあるオールドバラをたびたび訪ねて、彼のバートナーであるテノール歌手ピーター・ピアーズ Peter Peurs（一九一〇～八六）のレッスンをよく受けたものです。またブリテンのお宅で、彼が編曲した民謡をたくさん歌いましたが、いつもブリテンはそれを喜んで聴いてくれました。ちなみにこのオールドバラはイングランド南東部の保養地で、ここではブリテンが一九四八年にはじめた音楽祭が、現在でも毎年開催されています。

さて、これから二曲の民謡を歌います。一曲目は《愛するあの人にリンゴをあげよう》*I will give my love an apple*という歌で、本来はギター伴奏用に編曲されており、ブリテンが、イギリスの大ギタリスト、ジュリアン・ブリーム Julian Bream（一九三三～）のために編曲したものです。ブリームとは、ブリテンの自宅のあるオールドバラで何度かお会いしています。二曲目は《サリー・ガーデン》*The Salley Gardens*で、アイルランドの詩人ウィリアム・バトラー・イエイツ William Butler Yeats（一八六五～一九三九）の詩によるものです。

「愛するあの人にリンゴをあげよう」

愛するあの人にリンゴをあげよう、芯のないリンゴを。

愛するあの人に家をあげよう、ドアのない家を。

愛するあの人に宮殿をあげよう、あの人が住む宮殿を。
彼女はおそらく、鍵などなくても開けられるでしょうが。

僕の頭がそのリングゴで、それも芯のないリングゴ。

僕の心がその家で、それもドアのない家。

僕の心が宮殿で、それも彼女が住む宮殿。

そして彼女なら、鍵などなくても開けられるでしょうね。

「サリー・ガーデン」

サリー・ガーデン（柳の庭）をおりたところで

僕は、愛する人と出会ったんだ。

彼女は雪のように白く小さな足で

この庭を通り抜けて行った。

彼女は僕に言ってくれた

「木に葉が茂るように、愛も気楽にね」と。

でも僕は、若くて愚かだったから

彼女の言うとおりににはできなかった。

川のほとりの原っぱで、僕は愛する人と立っていたんだ。

彼女は僕の肩に

雪のように白い手を掛けて

彼女は僕に言ってくれた

「川の堰に草が育つように、人生も気楽にね」と。
でも僕は、若くて愚かだったから
いまはこうして、一人で涙に暮れている。

ベンジャミン・ブリテン本人は、それほど信心深い人では
ありませんでした。ただ、著名な宗教的リーダーの講義は、
たいへん好きでした。また、ブリテンは詩が大好きでしたの
で、その広範な文学的守備範囲のなかに宗教詩も、当然、含
まれていました。これからブリテンの宗教曲を二曲歌います。
一曲目は、一八世紀の神秘主義の詩人、クリストファー・ス
マート Christopher Smart（一七二二―一七九一）の詩によるもの
で、『ユビラーテ・アルゴ』または『小羊を喜び祝え』作品三〇
Rejoice in the Lamb, Op. 30と題されていて、創造主としての
神、そして人間を含むすべての生きとし生けるものを讃えてい
ます。短いテノールのアリア「花々は、大いなる祝福だから」
For the flowers are great blessings は、花々について語ります。
この花々とは神の恵みであり、神のみことばであり、キリスト
の詩でもあります。

二曲目は、ブリテンの偉大な平和主義的な作品『戦争レク
イエム』作品六六 *War Requiem*, Op. 66 から「アニヌス・デ
イ」*Agnus Dei* です。本来は合唱がラテン語で「神の小羊、世
の罪を除きたもう主よ、われらに永遠の安息を与えたまえ。」
Agnus Dei, qui tollis peccata mundi, dona eis requiem. と

歌うところを、本日はピアノの演奏でお贈りします。ブリテンは、政府に認められた「パシフィスト（良心的徴兵忌避者）」「Pacifist」で、常に戦争をテーマとした大規模な合唱曲を書きたいと思っていました。ブリテンは、第一次世界大戦時の詩人ウィルフレッド・オーエン Wilfred Owen（一八九三～一九一八）の詩から九編を選んでします。ブリテンもオーエンと同様、戦争を防ぐことができなかった政治家と宗教的指導者の失敗を非難しています。またブリテンもオーエンも、そしておそらく現在の私たちもみなそうだと思いますが、戦争のジレンマに直面しました。戦争という悪は、否定し、無くさなければなりません。

「花々は、大いなる祝福だからです」

花々は、大いなる祝福だから。

花々は、それぞれに天使がついて

神の創造のことはさえも持っています。

花は、神を讃え

根は、悪を受け流すのです。

花々には、ことばがあるから。

花々はとりわけ

キリストの詩情なのだから。

「アニユス・デイ」

テノール独唱

爆撃された道路の割れ目で、絞殺されてしまうのか。

この戦争では、主もまた四肢を失った。

だが、主の使徒たちは、バラバラになつて身を隠す。

そしていま兵士たちは、主とともに耐えるのだ。

合唱（ピアノ）

（神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、

われらに永遠の安息を与えたまえ。）

テノール独唱

ゴルゴダの丘の近くで、数多くの司祭らがそぞろ歩いている。

彼らの顔には、誇りがうかがえる。

やさしいキリストを拒んだ獣によつて

焼印を刻まれたという誇りだ。

合唱（ピアノ）

（神の小羊、世の罪を除きたもう主よ、

われらに永遠の安息を与えたまえ。）

テノール独唱

全人類の記録者らは

国家への忠誠を押し進め、叫ぶ

合唱（ピアノ）

（神の小羊、世の罪を除きたもう主よ…）

テノール独唱

しかし、より大きな愛を大切にする人々は
生命を犠牲にするが、憎みはしない。

合唱（ピアノ）

（：われらに永遠の安息を与えたまえ。）

テノール独唱

われらに平安を与えたまえ。

いかがでしたでしょうか。《戦争レクイエム》の「アニュス・デイ」ですが、歌詞の内容は悲惨さを極めています。しかしブリテンの音楽は最後の最後で、テノールが「われらに平安を与えたまえ」と歌うところに「慰め」というか、「救い」の響きを忍ばせています。ここは、興味深いところだと思います。

さて、私は、よくこういう質問を受けます。ブリテンのどの曲が、彼の才能を一番よく表していますか、と。これは、本当は難しい質問なのですが、私はこう答えることにしています。それは、《テノール独唱、ホルン、弦楽のためのセレナーデ》作品三一 *Serenade for Tenor, Horn and Strings, Op. 31* だ。

この作品は一九四三年に作曲されていて、ちょうどブリテンが麻疹にかかって、苦しんでいたときに作曲されています。私から見ると、この作品はブリテンの音楽の重要な特徴と、彼の性格をよく表していると思います。この作品からは、ブリテンが
いかに詩を愛し、英語の言葉を音楽にする才能に優れていたか、

実感することができます。そして、ここで、もう一度、ブリテンが、やはりパーセルから多くのことを学んでいることを思い出します。そして楽器の選択の上手さ。本日の演奏では、ホルンをご用意できませんでした。本来はフレンチ・ホルンが幻想的な夢の世界へと誘います。そしてこの作品は、明らかにブリテンの「夜と夢」に対する、抗しがたい魅力が描かれています。さらには、抑制された欲望に対してブリテンが感じていた罪、この罪に対する、見事な理性的な分別さえも表現されていると思います。

それでは、本日のレクチャーコンサートのおしまいに《セレナーデ》のなかの「ソネット」をお聴きください。

「ソネット」

おお静かな真夜中を満たす穏やかな香りよ

そなたは、慎重でやさしい指づかいでもって

私たちの眠たい両目を閉ざします。

光をさそぎり

聖なる忘却へと包み込みます。

おお、最も穏やかな眠りよ！ もしそうなら、お願いです。

このあなたの讃美歌のなかで、私の眠い両目を閉じてください。

あるいは、私のベッドの周りに催眠剤として



図4 レクチャーコンサートの終演時（左から渡邊順生、樋口隆一、訳者、久元祐子、ジョン・エルウィス、佐野千春）

あなたがケシの花を投げるまで「アーメン」を待ちます。
そして、私をお守りください。さもないければ、過去の想い
出が

私の枕の上に輝き現れ、多くの苦悩を引き起こすのです。
奇妙な意識から守ってください。
モグラが穴を掘るように入り込み
その暗闇のための力を未だにふるう
この意識から。
油っぽい鍵穴に鍵を手ぎわよく回し
寝静まった私の魂の小箱を封印してください。

* * *

（来場者の拍手を受けて）

それでは、アンコールといたしまして、ブリテンの編曲による民謡「若い農民」Ploughboyをお贈りします。この若い農民は野心家で、最初は牛の世話をする牧童だったのですが、最近、農民に出世したというわけです。その後、彼はどんどん出世し、召使、執事、管財人、政治家、そして最後には貴族になります。出世するたびに、野原でのんびり口笛を吹いていた、あの小さな農民のことなど忘れてしまうよ、と歌います（図4）。